

研究ノート

ジョチ朝支配下におけるモルドヴィン人の形成と貨幣発行

Formation of Mordovins and Minting in Mordovia under the Golden
Horde

安 木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

モクシェト人は、当初チャガタイ家の軍の先鋒とされたが、その後ジョチ家の民となった。少なくとも 1309 年までにモクシェト万人隊が形成され、首都モフシでの貨幣発行が認められたものと考えられる。現在のモルドヴィン人はモクシェトとエルジャという 2 つの民族から成るが、モンゴル帝国期にモクシェト人首長の下にエルジャが属したため、一つの万人隊となり、ソ連時代もモルドヴィン人として、ひとまとめにされた。

キーワード；モンゴル帝国、ジョチ朝、キプチャク・ハン国、貨幣、モルドヴィン人

1 はじめに

ジョチ朝（キプチャク・ハン国）当主トクトは、1299年にノガイを討ち、その直後、異母兄弟やノガイの子ら諸王の起こした反乱を鎮め、国内を統一した。1302年にイルハン朝に使者を送り、1304年と1308年に元朝からの使節団を迎え入れた。こうして1260年の世祖クビライ（セチェン・カアン）の自立以降つづいたモンゴル帝国の内戦が終わった。歴史家はモンゴルの東西和合をパクス・タタリカ、あるいはパクス・モンゴリカと呼んでいる。

ヒジュラ暦709年（1309年）からジョチ朝では、北コーカサスのマージャルや、ヴォルガ河中流域の現モルドヴィア共和国¹のモフシ（旧チェムニカフ）といった、それまで硬貨が作られていなかった都市でも発行されるようになった。

また、トクト期から、新プル yangi pul と呼ばれる、これまでよりも軽いプル銅貨が発行されるようになり、銅貨の金属価値と額面がますます乖離していった²。

トクト治下のヒジュラ暦709年の造幣所の増設と新プルの発行を、トクトの幣制改革と呼ぶ³。北コーカサスやモルダヴィアの分地分民が正式にジョチ家のものとして帝国全体から認められたから、ジョチ家のタムガやトクトの名前が入った硬貨が作られるようになったと考えられる。

図は、トクトの名が刻まれた、モフシで作られた銀貨である。本稿では、この銀貨が作られたモフシという万人隊（トメン、万戸）の形成過程とモフシで貨幣発行が始まった時期について考察し、ヒジュラ暦709年のトクトの幣制改革について論じる。

モフシで貨幣が発行されたのはヒジュラ暦709年～770年頃（1309年～1369年頃）の約60年間である。トクト（在位690年～712年）から始まり、ウズベク（在位712年～741年。トクトの甥）、ジャニベク（在位741年～758年。ウズベクの子）、キルディベク（在位762年～763年。ジャニベクの子と自称）、ミール・プラド（在位768年。シバン⁴裔）、そしてタガイベク（諸王ではなく万人長）の名が刻まれた貨幣が残っている⁵。

現在、モフシがあるモルドヴィア共和国の人口の4割がモルドヴィン人で、2010年の国勢調査によるとロシア国内にはモルドヴィン人が74万人ほどいる。1991年のソ連解体以降、モルドヴィン人は急減している。

モルドヴィンはモクシャ人（自称モクシェト *мокшеть*）とエルジャ *эрзя* の 2 つの集団からなり、モクシャ語とエルジャ語は両方ウラル語族に属するが、方言とは言えないほど両者には隔たりがある。ソ連時代に別の言語を母語とする 2 つの集団を 1 つの民族にしてしまったのである。ちなみにエルジャ語の方がモクシャ語よりも通用域は広い⁶。

モクシェトとエルジャという 2 つの集団が 1 つのかたまりだと見なされたのは、モンゴル帝国時代に万人隊が作られたからだと考えられる。

2 モンゴルによるモクシェト征服

13 世紀初頭、モクシェトはルーシ諸公およびキプチャク人と同盟し、エルジャは最北のイスラム教国ヴォルガ・ブルガルからの支援を得て対立するという構図であったが、モンゴル侵攻直前の 1230 年にモクシェトがエルジャを従えたようである⁷。

『集史』を参考にまとめると、1236 年にバト率いるモンゴル軍のキプチャク草原征服戦、いわゆる「バトの征西」が始まり、1237 年にモクシェト、ブルタス、エルジャ連合軍はモンゴル軍に敗退し降伏した。その後、バトの命令によりモクシェト首長プレシはモクシェト、ブルタス、エルジャから成る部隊を率いて、東欧侵攻作戦に加わることとなった。

1241 年初めにモンゴル軍はキエフを陥落させ、その後カルパチア山脈を通過してポーランドに侵攻した。ジョチ家のオルダ、チャガタイ家のバイダル、ウゲデイ（オゴデイ）家のイェケ・カダアン の 3 人の諸王に率いられたモンゴル軍先鋒はウラジミル・ヴォリンスキーから行軍を開始し、最初にルブリンを攻略し、1241 年 2 月に凍ったヴィスワ河を渡ってクラクフ公ウラジミルの守るサンドミルを陥落させた。

モンゴル軍はサンドミルから複数の軍団に分かれ、バト率いる本隊はカルパチア山脈のベレック峠からハンガリー平原に進撃し、バイダルが率いる支隊はサンドミルからポーランド南部に侵攻した。

1241 年 3 月にバイダル隊はフミエルニクの戦いでウラジミル率いるクラクフとサンドミルの連合軍を破り、ウラジミルは戦死した。その後クラクフはモンゴ

ル軍によって包囲され焼き払われた。プレシの部隊はサンドミルおよびクラクフ包囲戦で甚大な損害を被ったとされる⁸。したがって、プレシの部隊はバイダル隊に配属されたと考えられる。

バイダル隊はポーランド南部および西部を蹂躪し、ヴロツワフでオルダ隊と合流したが、ヴロツワフを包囲せずポーランド大公ヘンリク 2 世の軍勢がボヘミア軍と合流するのを阻もうとレグニツァへ向かった。

4月9日にオルダとバイダルの連合軍はレグニツァ近郊でヘンリク 2 世率いるポーランド・ドイツ連合軍に勝利しヘンリク 2 世は戦死した(レグニツァの戦い、あるいはワールシュタットの戦い)。このレグニツァの戦いでモクシャ首長プレシは戦死したと伝えられている⁹。

3 モンゴル支配下のモクシェト

モンゴルに征服されたモクシェトとエルジャは、東欧遠征に駆り出されたことでモンゴル式の軍団に再編された。最初チャガタイ家に属していたモクシェトとエルジャは結果的にジョチ朝の民になったと思われる¹⁰。

リュブリキのギョーム修道士の旅行記には、1250年代のモクシェトとエルジャについて以下のような記録がある。

「タナイス（ドン河—括弧内は引用者注。以下同じ）の向こうの地域は、川と森があつてとても美しい。北¹¹には巨大な森があり、2種類の人びとが住んでいる。一つはモクセル（モクシェト）で、つまり法なき者たちで、全くの異教徒である。町は持たず、森の中に小屋を持つ。その君主と彼らの大部分はアレマンニア（ドイツ）で殺された。タルタル人（モンゴル人）は彼らをアレマンニアの入口まで連れて行ったのだが、彼らはタルタル人への隷属から解放されることを期待して、アレマン人（ドイツ人）をととても称えている。商人が彼らのところに来ると、それが最初に留まる家の者は、彼らが留まろうとする間ずっとその世話を見なければならぬ。誰かが他人の妻と寝ても、その亭主は自分の目で見ぬ限り気に止めない。だから彼らは嫉妬深くない。豚、蜂蜜と蠟、高価な毛皮と鷹がいっぱいある。

その向こうに、メルダス（エルジャ）と呼ばれる者たちがいる。ラテン人はメルディニスと呼び、サラセン（ムスリム）である。」¹²

北方に広がる、比較的雨は多いが、寒冷でやせた土地に住むモクシェトは、森で豚を飼いながら狩猟・採集をし、焼畑農耕も行っていたのだろう。蜂蜜と蜜蝋は輸出品で、毛皮と鷹をモンゴルに貢納していたと思われる。

上述したように、バトの征西でチャガタイ家のバイダル隊の先鋒とされたモクシェト、ブルタス、エルジャが、ドイツ人と戦った。首長プレシが戦死したのだから、モクシェトの部隊そのものも大きな被害を受けたと考えられる。モクシェトがドイツ人を尊敬しているという話を、西欧側では好んで書き記している。

モクシェトの居住地はヴォルガ河の支流オカ河に流れ込むモクシャ河流域に位置し、これらの河川はジョチ朝の首都サライと北東ルーシのノヴゴロドを結ぶ一大国際商業ルートであった。このルート上にあるのがモスクワ、ニジニノヴゴロド（旧ゴーリキー）、カザンなどのロシア有数の大都市である。なお、ニジニノヴゴロドはエルジャの塞オブラン・オンを出発点とする。エルジャの居住地域とモクシェトの勢力範囲は現在のモルドヴィアより北方も含む広大な地域だったと思われる。

モンゴル帝国は統治対象を河川の流域（モンゴル語で Cholge、漢語で路）ごとに把握しこれを制度化していた¹³。例えば、『元朝秘史』にはモンゴル高原の北、シベリアに住む「森の民」が列挙されているが¹⁴、これらの集団名称は「河川名＋複数語尾あるいは人を表す接尾辞」からなる場合が多い。例えば、カンガス（カン河＋ス）、ウルスト（ウルス河＋ト）、トカス（トファ河＋ス）などである¹⁵。モクシェトとはモクシャ河の住民の意であろう。また、エルジャはモクシェト首長に率いられたことでモクシェトの一部としてモンゴル帝国の統治体制に組み入れられたと考えられる。

4 トクトの貨幣と称号

ヒジュラ暦 709 年（1309 年）から、アラビア文字でモフシ mkhshy と刻まれた銀貨や銅貨が発行されるようになった。この貨幣はモフシ Mokhshi あるいは

トメン（チュメン）という都市で発行された。モフシとはモクシャ河とモクシェト人のことであり、トメンとはモンゴル語・トルコ語で万を意味する（ロシア語であればティマ）。モンゴル帝国の民は十人隊（ハルバン）、百人隊（ジャウン）、千人隊（ミンガン）という十進法にもとづく集団として把握され、万人隊（トメン）は3,000人以上の兵を出す単位だった。

すなわち、モクシャ河流域に都市ができ、この都市はモフシと呼ばれ、またモフシが万人隊であったことを意味する。モクシェト万人隊の中心地がモフシあるいは万と呼ばれたのであろう。このモクシは旧チェムニカフ（万の町の意）で、現在のチェムニカフは16世紀にイワン4世の生母・摂政のエレナ・グリンスカヤにより建設され、モルダヴィア共和国最古の町として現存している。

図 モフシ発行トクトのディルハム銀貨(量目 1.51g、長径 21.3mm、短径 19.4mm)
(ZENO.RU:23797)



注) 画像の詳細は、ウェブサイト [zeno.ru](https://www.zeno.ru/) (<https://www.zeno.ru/>) の検索窓に 23797 を入れると見ることができる。ジョチ朝の他の地域で多く見られるアクチェ銀貨¹⁶の2倍の量目があり、額面1ディルハム、すなわちアクチェの2倍の価値がある銀貨だと考えられる。形式も量目も旧ヴォルガ・ブルガル国の都市で作られた銀貨の影響を受けている。

トクトの貨幣を見てみよう¹⁷。図の銀貨に刻まれているアラビア文字とインド数字を機械的にラテン文字とアラビア数字に置き換えると、

tvqtv bk / al 'adl zrb / mkhshy 709

となり、意味は「トクト、公正な君主、モフシ製造、ヒジュラ暦 709 年」となる。

まずトクトの表記であるが、tv と長母音で表しており、外来語（この場合はモンゴル語）の母音は長母音で表記する例が多いため、「トゥクトゥ」、あるいは v をオと書くと「トクト」とカナ表記することになる。ジョチ朝について書かれた外部の文書ではトクタ tuqta やトクタイ tuqtay と表記されるが、ジョチ朝の発行した貨幣にはトクトと書かれる。

次に、ベク・アル・アーディル（公正な君主）という称号についてであるが、カンではなくベク（君主）を使っている。同時期に北コーカサスのマージアルで発行された銀貨にはパーディシャー・アル・アーディルの称号が用いられている¹⁸。ベク（君主）とパーディシャー（大王）は同じ意味で、カンとは異なる考えると、トクトはカンの使用を避けていたことになる。

トクト以降の当主は、ウズベク、ジャニベク、ベルティベクなど、「ベク」が付くが、トクトもトクトベクと呼ばれていたことがモフシの銀貨からわかる。

5 おわりに

旧ソ連は形式的には 15 の民族共和国の同盟であり、またそれぞれの共和国自体が多民族から成っていた。旧ソ連地域に住む人々はソビエト政府によって所属する民族が決められたのであるが、こうした民族名称の中にはモンゴル帝国時代に登場したものもある。

例えば、ブリヤートは『元朝秘史』が初出であり¹⁹、ウズベクやカザフといった集団名もジョチ朝の分裂の中で形成された。東スラブがロシア、ウクライナ、ベラルーシに分かれていくのはモンゴル帝国期より前からだが、ジョチ朝の分裂が深まる 14 世紀の後半にはロシアとウクライナは政治的に分かれてしまい別々の民族になっていく。

こうした旧ソ連の諸民族の中でも興味深い存在のひとつが、本稿で取り上げたモルドヴィン人である。少なくともトクト期には出来上がっていたモフシの万人

隊（トメン）はモクシェトとエルジャからなり、エルジャの方が人口が多いものの、モクシェトのプレシが全体の長となって以降、おそらくプレシの一族が万人長を継承したことでモフシの名で全体が呼ばれるようになったのだと思われる。

バトの征西の結果、モンゴル帝国はキプチャク草原とその隣接地域であるバシコルトスタン、クリミア、北コーカサス、ヴォルガ・ブルガル、ルーシ、モルドヴァ、ワラキアを版図に加え、第2次ブルガリア帝国やスラヴォニア（クロアチア）を属国とした。新版図はモンゴル諸王の共同統治領だった²⁰。

ところが、バトが憲宗モンケ・カアン²¹の即位を全面的に助けたことで、モンゴル帝国の西半分ではジョチ家が絶大な影響力を持つにいたった。ヴォルガ河中流域の旧ヴォルガ・ブルガル国や北コーカサスのデルベントなどには、モンケ・カアンをはじめとするトルイ家の分地もあったが²¹、チャガタイ家やウゲデイ家の分地があったかどうか定かではない。ギョーム・ド・リュブリキによれば、チャガタイ家の諸王ブリは自身の牧地がキプチャクにないと不満を漏らしたことでバトに処刑された²²。

1260年～1264年にモンケ・カアンの後継を巡ってアリクボコとクビライとの間で内戦が起き、モンゴル帝国西部ではジョチ家のベルケとトルイ家のフレグが対立し、また中央アジア・マーワラーアンナフルの権益をめぐる諸王間の争いが激しくなった。結果的に、マーワラーアンナフルの権益はチャガタイ家が3分の2、ウゲデイ家とジョチ家が3分の1を取るようになった²³。

ジョチ家では1280年にモンケテムルが死去して以降、当主の継承をめぐるしばしば混乱があったが、1299年にモンケテムルの子トクトが諸王ノガイを討伐して再統一された。また、1301年にカイドゥが死去し、1308年に武宗カイシャンの下でモンゴル帝国の内乱は終わった。

トクトは1309年から北コーカサスのマージアルやヴォルガ河中流域のモフシで貨幣発行を始めた。おそらくこうした帝国直轄領がジョチ家の領土だと正式に帝国全体で認められ、またカアンが専有していた貨幣発行権がジョチ家当主に譲り渡されたと考えられる。

これまでもなし崩し的に各地で貨幣は作られ、そうした貨幣の多くにジョチ家のタムガや当主・諸王の名が刻まれていたが、カイシャン即位以前には作っていなかった都市でも貨幣発行ができるようになったのである。そのかわりカイシャ

ンをモンゴル帝国全体の元首として認めたことで、トクトはクリム（クリミア半島スターリィ・クリム）以外ではカンとは名乗らず、ベクやパーディシャーという称号を使った。すなわち、モンゴル帝国期にカアンとカンには意味上の違いがほとんどなかったものと思われる²⁴。

「パクス・タタリカ」の下で新たに造幣が認められたのは、北コーカサスのアスト（オセツト人）のマージャルと、モクシェト（モルドヴィン人）のモフシであった。貨幣発行権の付与は、ジョチ朝におけるアストとモクシェトという、非モンゴルの地位向上を示すものでもあっただろう。

これに対して、リトアニアやモスクワで正式に貨幣発行が認められるのは、1386年以降である。なぜリトアニアやモスクワが貨幣発行を認められたのかについては、別稿で論じたい。

注

¹ ロシアの連邦構成主体は、日本の都道府県にあたる。連邦構成主体の中には、ソ連時代の制度を引き継ぎ、例えば、タタールスタン共和国、ネネツ自治管区、ユダヤ自治州などのように、少数民族名を冠するものがある。近年、ブリヤート人やコリヤーク人などの自治管区が廃止され、また、共和国の首長が大統領と名乗れなくなるなど、民族自治権が削られている。

² 安木新一郎（2020a）「大モンゴルの小額貨幣：ジョチ朝（キプチャク・ハン国）における銀貨・銅貨交換比率について」、岩橋勝編著（2020）『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』、晃洋書房、13章、269頁～283頁。元朝では、1276年の至元鈔発行以降、「至元鈔1貫＝銅錢1貫＝中統鈔5貫」でかつ「至元鈔2貫＝銀1両」、つまり、「銅錢200文＝銀1錢」（文と錢は同じ重さを表す単位。約3.7～4グラム）という公定交換比率が事実上、導入されていた。ジョチ朝では、初期は「プル16枚＝アクチェ銀貨1枚」（1プルは3ダング、1アクチェは1ダング＝0.78グラム）で、重量比だと「銅貨48＝銀1」となり、元朝に比べ銅貨の価値が大きかった。新プルは実測値で0.8グラム～1.7グラム程度まで減重するので、銀に対してますます銅貨高となった。北宋では金属価値が額面を上回る銅銭を流通させていたと言われているが（黒田明伸（2020）『貨幣システムの世界史』、岩波現代文庫）、異論もある。金属価値以上の評価を国外でも得られたから、北宋の王安石は銅地金ではなく銅銭の輸出を認めたと考えられるからである（井上正夫（2022）『東アジア国際通貨と中世日本：宋銭と為替からみた経済史』、名古屋大学出版会）。これに対して、ジョチ朝の場合、法的強制通用力を持たせた銅貨に金属価値よりも大きな額面を付けることで、銅貨のジョチ朝域外への流出を防いでいたと思われる。なぜなら、ジョチ朝域外では銅貨は金属価値以上の評価を得ら

れないので、持ち主にとって域外への持ち出しは損失になるからである。宋銭は国際通貨だが、プルは国際通貨になれなかった。

³ Фёдоров-Давыдов, Г. А. (2003) *Денежное дело Золотой Орды*. М.: Палеограф.

⁴ シバンはジョチの第6子で、ジョチ朝右翼（西側）の有力王家の始祖。シバン家の諸王は14世紀後半から、左翼（東側）を構成する第13子で末子扱いのトカテムルの子孫と当主の座を争った。

⁵ Лебедев В.П. (2014) *Монетный Чекан Мохши, Музей денег* (<http://muzeydeneg.ru/research/monetnyiy-chekan-mohshi/>).

⁶ 田中克彦・ハールマン、H. (1985) 『現代ヨーロッパの言語』、岩波新書、162頁～163頁。

⁷ Юрченков, В. А. (2007) *Мордовский народ: вехи истории*. Саранск., с.97-98.

⁸ Там же, с.116.

⁹ Там же.

¹⁰ アフガニスタンでは、ジョチ家派遣軍の後裔がニクダリヤーンと呼ばれるようになり、チャガタイ家に属するようになった。北川誠一 (1980) 「ニクダリヤーンの成立」『オリエント』、22 (2)、39頁～55頁参照。

¹¹ ギョームはクリミア半島南岸で上陸し、北上してペレコプ地峡を渡り、アゾフ海北方を東行し、ドン河を渡り、3日後にバトの長子サルタクのいるヴォルガ河下流域、現在のヴォルゴグラード付近に着いた。引用した箇所はサルタクの幕営に着く前の描写である。ここでは先に「向こうの地域」と言った上で、直後に「北」と言い直している。ドン河は中流域では東に向かって流れ、その後南に流れを変え、ヴォルガ河にカラチあたりで接近した後、アゾフ海に注ぐ。ギョームは東に向かって進んでいるのだから、ドン河の「向こうの地域」とは、ヴォルガ河下流域のはずである。ところが、モクシェトとエルジャの実際の居住地は渡河地点から見れば北になる。また、ヴォルゴグラード周辺は草原地帯で、森林は広がっていない。ギョームへの情報提供者はモンゴル人で、「向こう（側）」を「北」の意味で使ったと想像される。なぜなら、モンゴル語で「北」と「向こう側」は同じ単語だからである。モンゴル語を知らない人にとって、「向こう」といわれてもどの方位かは明らかでないので、「北」と言い直したと思われる。また、モクシェトの「向こう」にエルジャがいると述べているが、モクシェトのいるモクシャ河流域よりも北の、現在のニジノヴゴロドに至るヴォルガ河流域一帯がエルジャの居住地だったのだから、ここで使われる「向こう」もまた、「北」の意味である。モンゴル帝国時代の方位の表記については、村岡倫 (2020) 「モンゴル帝国時代の史料に見える方位の問題 —時計回り 90度のずれが生じる要因—」『13、14世紀東アジア史料通信』、25、2～14頁、および中村和之 (2022) 「モンゴル帝国時代のサハリン島の史料に見える方位のずれについて」『函館大学論究』、54 (1)、1～14頁、を参照。

¹² 高田英樹編訳 (2019) 『原典中世ヨーロッパ東方記』、名古屋大学出版会、200

頁。

- 13 川本正知 (2013) 『モンゴル帝国の軍隊と戦争』、山川出版社、151 頁～152 頁。
- 14 『元朝秘史』、239 節 (小澤重男訳 (1997) 『元朝秘史』、下、岩波文庫)。
- 15 安木新一郎 (2020b) 「森の民」に関する覚書：モンゴル帝国支配下のシベリア」『函館大学論究』、52 (1)。
- 16 アクチェ *aqche* とは「白くて小さい」という意味だが、中国銀は西のものより白っぽかったとされ、中国銀がジョチ朝で銀貨に鍛造されていた可能性がある。
- 17 貨幣に刻印されている文字については *Лебедев* (2014) を参照した。
- 18 安木新一郎 (2015) 「貨幣が語る中央ユーラシアの歴史：モンゴル帝国の貨幣」、佐島隆・佐藤史郎・岩崎真哉・村田隆志編 (2015) 『国際学入門：言語・文化・地域から考える』、法律文化社、17 章、135 頁～140 頁。
- 19 『元朝秘史』、239 節。
- 20 前田直典 (1973) 『元朝史の研究』、東京大学出版会、197 頁。川本 (2013)、103 頁～105 頁。
- 21 高田編訳 (2019)、282 頁。
- 22 高田編訳 (1979)、216 頁～218 頁。
- 23 川本 (2013)、188 頁～189 頁。
- 24 安木新一郎 (2018) 「イスラーム貨幣に打刻されたモンゴル帝号について」『京都経済短期大学論集』、26 (2)。